

はじめに

ガリレオ裁判について簡潔にまとめた論考、ナバラ大学神学部教授の Mariano Artigas, "Lo que deberíamos saber sobre Galileo" (「ガリレオについて知ってるはずのこと」), *Scripta Theologica*, XXXII, 2000年9-12月、pp.877-898を訳しました。若干の省略と注の付加があります。この記事と並んで、バリ大学の Paolo Ponzio, "Ciencia y fe en la historiografía galileana de los años 90. Nota crítico-bibliografía" (「ガリレオ関連の90年代の文献に見る科学と信仰。批判的文献紹介」), *Ibid.*, pp.865-876)も同誌に出版されています。

文中に出る「青木」は、青木靖三、『ガリレオ・ガリレイ』、岩波新書、1965年版です。

2001年10月、尾崎

## ガリレオ研究の現状

ガリレオ裁判は、カトリック教会が科学の進歩の敵であることを示すためによく使われる。この理由のために、少なからぬ数の司祭、修道者、その他の神学の知識をもつ人々を含めたカトリック信者がこの問題についてかなり表面的な知識、あるいは時には誤った知識しかもっていないことは驚きに値する。

数年前ローマの大学で博士課程の授業を担当していたとき、ガリレオ裁判について話したことがある。授業が終わると、博士論文を作成中の一人の司祭が私に近寄ってきた。彼は非常に立腹して言った。「何年も神学校で教え、今ローマで博士論文に取り組んでいるカトリックの司祭である私が、今日の今日までガリレオが異端審問法廷によって死刑にされたのではないことを知らなかったなんて、なさげなくて腹が立ちます」と。これと似たような経験がある程度周期的に起るので、私は今回ガリレオ裁判の中心的な側面を、極めて簡単にはあるが、まとめてみようと思いついた。つまり、何が起って何が起らなかったのか、どういう問題が引き続き論議されているのか、つまるところ問題の現状は何なのかをはっきりさせることを試みたい。

ガリレオ裁判についての無知と誤解の原因は何かというテーマは、一つの研究に値するものであろう。部分的には、それはこの問題を取り上げるとき余りにしばしば偏向的な扱いをすることに帰せられよう。つまり、ある人たちは教会を攻撃したい余り、事実をゆがめ自己に都合が良いことだけを強調し、またある人たちは教会を弁護しようとして、問題の複雑性を理解せずあまりにも安易な護教論を展開した。現在ではガリレオについての多くの高度な研究が存在し、そのおかげで何がわかっていて何がわかっていないかを客観的に指し示すことができる。教会は、その最高の代表者、教皇の口から、このテーマを明らかにしたいという明白な望みを表明した。教会の代表者たちがガリレオに対して犯した過ちを認め、謝罪することにすら吝かでない。この有名な裁判について冷静なまとめを発表するのによい時期にいると言える。

### 1、ガリレオはいかにして死んだか。

(略)。ガリレオは1564年2月15日ピサで生まれ、1642年1月8日フィレンツェ郊外のアルチェトリの自宅でなくなった。享年78歳(フィレンツェでは、3月25日を年の変わり目とする曆を使っていたので、年齢に差があることがある)。最後の30ヶ月の間、ガリレオにつき添った若い弟子 Vincenzo Viviani によれば、彼の肉体はかなり消耗していた。30歳のときからひどい関節炎を患っており、その上「まぶたにほとんど耐えがたい炎症」、そして「研究と徹夜で疲れた老齢の体が苦しむ他の病気」を持っていた。そのような中で、ガリレオ

は様々な研究の計画を暖めていた。しかし、ついに「熱が彼を襲いゆっくりと彼を消耗させ、激しい動悸も加わって、二ヶ月の間徐々に体力を弱め、とうとう1月8日水曜日朝の4時、よき哲学者、よきキリスト信者の態度をもって77歳10ヶ月と20日の寿命を全うした。」(略)。

また死刑を宣告されたのでもなかった。有罪判決を受けたただ一回の裁判は1633年のもので、禁固刑を宣言されたが、そのよい態度を鑑みて即座に自宅拘禁に変えられた。決して牢屋に入るにはいたらなかった。当時の習慣によれば、裁判中は異端審問法廷の牢獄に寝起きする義務があったが、彼は一度もそこに入ったことはない。裁判が始まる前にローマのフィレンツェ宮殿にあるトスカナの大使館に住んだし、裁判中は異端審問法廷の建物の中に住むように要求されたが、その聖職者が使う部屋を提供され、またトスカナ大使館から食事を運ぶことも許された。裁判が終わると、見事な庭園を持つトスカナ大公の邸宅でローマの最も高級な邸宅の一つ、ヴィッラ・メディチに住むことが許された。これらの事実は、ガリレオが公式にトスカナ大公お抱えの筆頭数学者、哲学者であったことを考えれば驚くに値しない。トスカナ(フィレンツェ、ピサ、リボルノ、シエナなどを含む)は重要な国家で、伝統的に教皇庁とは友好的な関係にあり、トスカナ当局はガリレオがローマにおいて最良の待遇を受けるために、調停に腐心した。トスカナの大使、Francesco Niccolini はガリレオをとでも評価し、裁判中の不便をできる限り少なくし監獄に入れられないようにあらゆる手段を講じた。彼のおかげで裁判が終わると、禁固刑がヴィッラ・メディチへの軟禁刑に減刑された。数日後シエナに移ることを許され、この町では大司教 Ascanio Piccolomini の邸宅で生活した。この大司教はガリレオの大ファンであり友人であったため、彼の滞在中非常に心を込めて接したので、訴訟によるものと思われる病気から元気を取り戻した(訴訟のあった1633年には、ガリレオは69歳であった)。その後フィレンツェ郊外の彼の自宅に戻ることが許され、そこに死ぬまで留まった。彼の最も重要な書物は、このときに出筆され上梓された。それは1638年、つまり裁判の後である。

要するにガリレオは死刑に処せられたのではなく、最初は禁固刑を命じられ、それもすぐに減刑されたのである(略)。

また、ガリレオは拷問や残酷な仕打ちを受けたのでもない。もちろん、69歳の老人を裁判のためにフィレンツェからローマに行かせるのは、暖かい待遇ではない。また、裁判の審議とその後の判決と宣誓の間の苦しみも無視できるものではない。それは確かである。心理的な見地からすると、これらの苦しみは彼の健康に与えた悪影響によって、ガリレオは裁判の後シエナに着いた時、健康を害していた。しかし、当時としては普通のことであった肉体を痛めるような扱いを、ガリレオが受けなかったことも同様に確かである。ガリレオが裁判の終りに拷問を受けたと主張した学者もあった。しかし、今では、あらゆる傾向の専門家がほとんど全員一致でその事実を否定する。裁判の最後の段階で、裁判官の側から拷問の脅迫を受けることがあったが、現在知られている史料はどれも、それが異端審問法廷の規則によって裁判官が言及するが、実際に実行に移されることのない、訴訟上の単なる形式であったことを示す。(しかも、ローマではガリレオのような高齢者には拷問は行われなかったことが分かっている)。ガリレオはシエナで健康を回復した。その後色々な病気に苦しんだが、それらは彼が以前から持っていた持病で年とともに悪化したものである。完全に視力を失うが、これは裁判とは関係がない。

## 2、ガリレオはなぜ裁かれたか。

我々が最も関心を引かれることは、実際はなかった肉体的虐待ではなく、ガリレオが裁きを受けたという事実である。言うまでもなく、彼は殺人や盗みなどの犯罪を犯したわけではない。では、なぜ断罪されたのか。刑罰はどういうものであったのか。

普通二つのガリレオ裁判が知られている。1616年と1633年のものである。時々二回目の裁判だけが注目されるが、その理由は簡単である。最初の裁判ではガリレオはローマの異端審問法廷に訴えられ審議が進められたが、本人は裁判所に出頭を命じられるに至らなかったからである。被告は、訴えの存在と審議の進行について第三者を通じて知っていたが、裁判所は彼に何も言わず、出頭も命じることなく、判決も下さなかった。それゆえ、しばしばこれを裁判とは考えないのである。それに対して、1633年のものは完全な裁判であった。つまり、ガリレオはローマの異端審問法廷に出頭するように召喚され、その裁判所に出頭し答弁し最後に判決を受けた。この二つの裁判はとても異なったもので、かなりの年月を隔てたものであるが、互いに無関係ではない。というのは、1616年に起ったことが1633年の裁判を大きく条件づけているからである。

## 2, 1、1616年の裁判

1616年ガリレオは、古代にはピタゴラス派によって、近代にはコペルニクスによって提案された地動説を支持したというかどで告訴された。(略)。地動説は地球が不動で太陽が動くと言明している聖書の箇所に対抗するように思われた。さらに、教会の伝統は、何世紀にもわたってこのように聖書を解釈してきたし、トレントの公会議もカトリック信者は教父たちの一致した聖書の解釈から離れる解釈をしてはならないと強調していた。

1616年の事件は裁判外の二つの決定で解決された。一つは、1616年3月5日付けの図書検閲聖省の文書(注1)。これによって禁書目録の中に、1543年に出版されたコペルニクスの『天体の運動について』、ならびに1584年にトレド、1591年にはローマで出版されたアウグスティヌス会のスペイン人司祭 Diego de Zúñiga の注釈(聖書のいくつかの箇所をコペルニクスの考えにそって解釈している)、1615年に出たイタリア人のカルメル会修道士 Paolo Foscarini の小論文(コペルニクスの説が聖書に反しないと弁護)が入れられた。そして、同じ説を唱える書物はすべて禁書となると宣言された。その理由としてこの文書に挙げられているのは、地球が動き太陽が止まっているという考えは誤りで、聖書に真っ向から反対するというものであった。もう一つの決定は、ガリレオに個人的に注意を与え、地動説を捨てるように、その説を弁護しないようにすることであった。

フォスカリーニの小論文は全面的に禁じられたが、コペルニクスとスニガの著作の禁止は若干の箇所を修正するまでという条件付であった。スニガの場合、修正箇所はほんの少しであった。コペルニクスの修正箇所は、地動説が真実の理論でなく、ただ天文学の計算のために便利な装置に過ぎないことを説明する様々な箇所であった。実際、それらは4年をかけて修正され、1620年に認可された。

我々にとって不可解なことは、聖書が科学的な問題について話すとき、しばしば周囲の文化で認められている話し方を採用するという今日では明らかな問題に、なぜそれほど無理解だったのかということである。事実、この主張は、ガリレオが彼の主張を写して広めた Benedetto Castelli(ベネディクト会士、ガリレオの友人で弟子、ピサ大学の数学の教授)に書いた手紙と、トスカナ大公の母クリティーナに宛てた手紙でより詳しく説明した主張である。

事件の背景を理解するために、三つの問題に触れなければならない。まず第一に、ガリレオは1609 - 1610年の天文学的発見によって有名人になっていたことである。つまり、彼自身がその完成に決定的に貢献した望遠鏡を使って、月にも地球と同じく凹凸があること、木星の回りには四つの衛星があること、金星には月と同じように満ち欠けがあること、太陽の表面には移動する黒い点があること、また肉眼で見えるよりずっ

と多くの星が存在することなどを発見したのである。ガリレオはこの発見を基礎に、アリストテレスの学説を批判しコペルニクスの説を支持した。当時学会において圧倒的な勢力をもっていたアリストテレス主義の学者たちは、ガリレオの主張が自分たちの学問を否定し、時には嘲笑していると感じていた。これらの学者がガリレオを激しく攻撃し、自説の弁護が行き詰まると、神学的議論(いわゆる地動説と聖書の対立)を振りかざす者が出たのである。

第二に、あの当時カトリック教会は伝統的な聖書解釈から離れて自由な解釈を使用とするものに対し特別に神経質になっていた。それはプロテスタントとの対立がきわめて激しいものだったからである。ガリレオは、地動説が聖書の教えと対立するという議論を反駁しようとしたが、そのときに神学の領域に入ってしまった。(略)。ガリレオの議論はかなり正確なものであった。彼は、聖書は科学を教えるものではなく、その時代の知識に適応した表現をすると説明し、さらに教会の伝統の中に彼の主張するような解釈の前例があることさ示した。しかし、プロテスタントとの激しい神学的論争が展開されていた時代に、一般信徒が少々奇異な新説を提示し神学者に教えを垂れることは、反発を惹き起こした。

第三に、地球を宇宙の中心に置く伝統的な宇宙観は、日常の経験と合致するものであると思われていた。(略)。もし地球が動いたら、真上に投げられたものは後ろに落ちるであろうし、雲がどうしてどんどん後方に動かないのか説明がつかない、またそれほど早い動きが体に感じられないのはおかしい、などと反論された。その上、天動説は、人間のためにすべてが創られたというキリスト教の教え、さらにイエス・キリストの託身と全人類の救済の教えも、それを支持しているように思えた。実際、コペルニクスの説を支持した者の中にジョルダノ・ブルノーがいたが、彼は地球以外にも人が住んでいる星がたくさんあると主張し、最後には異端的と思える考えに陥った(ブルノーは1600年にローマの異端審問法廷によって断罪され焚刑に処せられた。ただ、彼は、コペルニクスの説を出発点としたが、本来の意味での科学者ではなかった)。

1616年の事件は、最終的に上述の著作をそれぞれ異なる条件のもとに禁止した、同年3月5日付けの図書検閲聖省の文書によって終了した。(略)。この文書は、聖省の名前によって発布され、聖省の長官と秘書によって署名されたが、教皇は署名していない。当然のことであるが、この種の行為は教皇の命令が同意を得てなされる。それゆえ、ある程度教皇の権威が関係しているが、教皇の不可謬性が関わる行為として考えることはできない。なぜなら、まず教皇の署名がないし、また教皇についての言及すらないから。そして、これは一つの聖省の行政措置であって、教導の措置ではないからである。その上、これは一つの教義を定義しようとしたものでもなかった(注2)。このことは、現代と同じく、当時もまったく疑問の余地のないことであった。その証拠として、ベネデット・カステリがガリレオに宛てた手紙を挙げることができる。これはガリレオがすでにローマの異端審問法廷に出頭を命じられていた1632年10月2日のものである。カステリは、検邪聖省の担当司祭 Vincenzo Maculano 神父と話し、コペルニクスとガリレオの正統性を弁護した。さらに付け加えて、このことについてはすでに何度も経験で博学な神学者と話したが何の困難もなかった、と言う。また、マクラノ神父自身、自分も同じ意見であること、問題は聖書を参照にして解決するものではないとカステリに言っていたと伝える。つまり、それらの話題が検邪聖省の司祭によって扱われたという事実は、1616年の図書検閲聖省の教令(訳者注、地動説は聖書に反するという内容)が不可謬または決定的な性格のものであると考えられていなかったことの証拠である。

3月5日に教令を出す前に行われた教皇庁の審議では、検邪聖省の11人の顧問官に意見が求められたが、彼らは2月24日、太陽が宇宙の中心に位置し不動であるというのは哲学的に不条理であり、聖書ならびに教父と神学者たちの教えに反するところから異端である、また地球が動く主張するのも哲学的に不条理

であり、少なくとも信仰上誤りである、と結論した。この神学顧問官たちの意見を教会の権威ある決定と考える誤りがよく見かけられる(訳者注、青木がその例である。92 - 93頁)。しかし、これはそれらの神学者の答申に過ぎない(訳者注、この答申は公式に発表されず、検邪聖省の内部文書に載っている)。教会の権威による唯一の措置は、図書検閲聖省の教令であり、そこでは地動説は異端であるとは言っていない。ただ、この説は誤っており聖書に反すると言っているのである。このニュアンスの違いは大切であり、当時の神学の専門家ならば皆それを理解していた。地動説を異端として断罪したとは誰も考えなかったし、今もそう考えるべきではない。それだからこそ、ガリレオだけでなく、カトリックの人々の中にも、地動説を固持しつづけた人がいたのである。ガリレオは、カステッリヤトスカナ大公への手紙で語るように、地動説は聖書と両立し、それを教会の伝統の中に見出せる原則を使って証明できると分かっていた。

しかし、1616年の教会当局(訳者注、図書検閲聖省)の決定は、たとえ地動説が異端であると断罪しなかったにしても、誤判であった。ガリレオと彼の友人の教会関係者は、この決定の撤回に向けて立ち上がった。その企ては可能であった。なぜなら、この決定は行政的性格のもので、教義的な評価を含んでいなかったが、地動説を異端と断罪せず、また不可謬性を伴う教導職の措置でもなかったからである。

もう一つの重要な点は、ガリレオの天動説批判は理論的に正しかったが、当時はガリレオを含む誰も、地球が太陽の周りを回っていることを証明する議論を提示し得なかったことである。地動説は、むしろ聖省の神学者たちが宣言したように、不条理に見えた。ある有名な書簡の中で、当時最も影響力のあった神学者 Roberto Belarmino 枢機卿は、フォスカリーニとガリレオに対し地動説を天文学的仮説として提示するにとどめ、それが真実であると主張せず神学の議論にも立ち入らないように頼み、そうすれば問題は一切ないと伝えている。しかしガリレオは、自分になされた批判に答えるため、また教会がこの問題に干渉しないようにするために、コペルニクス説を敢然と弁護し、ローマに赴いて影響力のある教会人を説得しようとした。しかし、これは逆効果となった。つまり、教会人は、その批判においてかなり説得力があったガリレオの宣伝を制御しようという方向に進んだのである。

図書検閲聖省の教令の他に、教会当局はガリレオ個人に関し17年後の裁判で決定的な役割を果たすもう一つの決定を下した。つまり、教皇パウロ5世の命により、1616年2月26日ベラルミーノが当時コペルニクス説の宣伝のためにローマにいたガリレオを呼び、常住の邸宅でコペルニクス説を捨てるように訓告した。教皇の命令は、もしガリレオが地動説を捨てるのを望まないのなら、検邪聖省の委員会は公証人と証人の前で、彼にその理論を教えるも弁護も触れることもしないように命令し、もし命令を聞かない場合は禁固刑に処するというものであった。ベラルミーノがこの訓告をしたことは確認されている。しかし、現在残っている史料の中に、この命令の強さと範囲に関して論争を惹き起こしたものが一つある(訳者注、青木、85頁)。すなわち、その文書には、この枢機卿の注意に続いて、検邪聖省の長官ドミニコ会士 Michelangelo Segizzi 神父が上記の命令をガリレオに伝えたことと記されている。問題は、その文書には署名が欠けていることである。これについて実に様々な解釈がなされた。最も極端なものは、1616年か1633年にガリレオを陥れるために捏造されたものであるという。しかし、これはほとんどありえない。現存する史料からは、ベラルミーノとガリレオの間にはいかなる会話があったのかを知るの非常に難しい。しかし、ガリレオが今後コペルニクス説を支持しつづけることはできないと理解したことは確かである。実際、数年の間そのようにした。17年後の裁判は、まさに、一見すると彼がこの命令に背いたという理由で始まるのである。

## 2.2.1633年の裁判

1616年の図書検閲聖省の教令は誤判であったが、ガリレオにコペルニクス説を扱うことも弁護するこ

とも禁じた命令もそうであった。ガリレオはそのことを分かっていた。しかしながら、その誤った処置に従った。彼は常によりキリスト信者であろうとしたし、また事実そうであった。しかし、1616年の禁止命令が誤った考えによるものだと知っていたので、この誤解を解こうとした。それだけでなく、もし将来地動説が正しいことが証明されたならば、今回の禁止命令がつまりきになりえることを警告さえした。彼の友人たちも同じ意見であった。

1623年に時を同じくして1616年の決定の再検討を促す、あるいは少なくとも控えめながらコペルニクスの説を支持する議論を可能にするよい条件がいくつか生まれた。その主要な事件とは、Maffeo Barberini 枢機卿が教皇ウルバノ8世となったことである。この人物はすでに何年も以前からガリレオの崇敬者で、彼の天文学的発見を称えたラテン語の頌歌を捧げたことさえあった。しかも、最初からガリレオの友人や支持者たちの多くを重要な地位に就けた。1624年にガリレオはローマに上り、教皇は6度も非常に親しく彼と謁見した。しかし、コペルニクス説についてのウルバノ8世の意見に探りを入れたガリレオは、教皇がそれを異端とは考えていないにしても(既に見たように、一度も異端という断罪を下されなかった)、それを非常識な説とし、決して証明されえないと考えていることを確認した。ウルバノ8世は、地動説を使って説明できる同じ事象が、他の異なる原因によるという可能性もある、なぜならばそれらの現象が地動説でしか説明できないならば、神の全能を制限することになるから、と言っていた。一見するところ、この説は強い説得力をもっているようであり、地動説を証明できると主張する者は、神の全能に限界を置くような印象を与えた。

にもかかわらず、新教皇の気質とガリレオの友人たちが示した影響力のおかげで、彼は長年中断していた企てに取り組むことにした。それは、コペルニクス説について議論する大著(もちろん、この説を支持する立場で)を書き上げることであった。その構成は、天動説者と地動説者の対話形式であり、どちらが正解かを言明することは避けられていた。しかし、少し頭の回転のよい読者なら、どちらが正しいかは理解できるようにしてあった。

その上、ガリレオは地動説を証明できる新しい理論を発見したと考えていた。それは潮汐である。彼によれば、潮の満干は地球が動いているとの前提でのみ説明できる(潮汐が月の影響で起ると言う理論は、占星術のような響きがあるあので、認めなかった)(注3)。さらに、彼の著書を『海の満干についての対話』という題をつけようとしたが、それを知った教皇が、「その題ではコペルニクス説が海の満干によって物理的に立証されるような感じを与えるから、純粋に数学的に取り扱ったような題に変えるよう」(訳者注、青木、125頁)に助言した(周知のように、潮汐は地動説の証明にはならない)。ガリレオは本の題名を変更し、それを『プトレマイオス説とコペルニクス説という二つの主要な体系についての会話』とした。(略)。彼は、伝統的考えを反駁しコペルニクス説を擁護するこの著作を出版できるならば、必要ならどのような譲歩もする覚悟でいた。

ガリレオはこの作品を1630年に書き終え、教会から出版許可をもらうためにローマに出向いた。許可は、教皇宮殿付き神学顧問のドミニコ会士 Niccolò Ricardi 神父から出された。この神父は天文学には通じていなかったが、ガリレオの崇敬者で、日頃から彼の力になりたいという望みを持っていた。さて今リッカルディは窮地に立たされた。著作に問題はないとしたが、同時に一連の修正の必要があることを認めたのである。ガリレオはフィレンツェに帰ったが、その後ペストのためにローマとフィレンツェの郵便が滞りがちになり、それによって許可の発布が遅滞しガリレオは神経質になった。一年後ガリレオは出版許可を得るために、トスカナ大公とローマ駐在のトスカナ大使に仲介を申し込み聞き入れられた。リッカルディもまたトスカナの出で、大使の妻の親戚であったので、強い圧力を感じざるをえなかった。とうとうフィレンツェで例の書物を出版する許可が出されたが、そのための少なからざる条件がガリレオと同市の異端審問法廷に告げられた。リッカルディは教皇

の考えを知っていた。つまり、コペルニクス説は、現実の説明としてではなく、数学的仮説としてのみ話すことができる、というもので、ガリレオの著作ではこの点がきわめてあいまいであったので、許可の条件はそれを明らかにするものであった。

ガリレオは修正を行ったが、それらはリッカルディが指摘し教皇が望んだ条件を網羅するものではなかったことは確かである。著作の中で、伝統的なアリストテレスとプトレマイオスの説を支持するシンプリシオは常に議論に敗れる。シンプリシオは古代の最も有名なアリストテレス注釈者の一人であるが、ガリレオの著作ではその主張と態度はあまりにもその名前(「お馬鹿さん」の意)にぴったりであった。他方、教皇が好んで使った議論が著作の最後に、つまり、すべての科学的、哲学的議論が提示された後で登場している。そして、この議論はシンプリシオその人が主張しており、コペルニクス説の支持者サルヴィアティ(とガリレオ)はそれを是としているが、それは最後にほんのちょっと、しかも含みを残してである。さらに混乱を強めることは、リッカルディが許可を与えた序論(この著作はコペルニクス説を真実のものとして提示するつもりがないことを説明している)が、著作全体とは異なった活字で印刷されており、後からの付け加えという印象を与えていた。

『対話』は1632年2月21日フィレンツェで出版された。すぐにガリレオはそれを外国の友人を含む、あらゆるところに送った。ところが、ローマとフィレンツェの間の交通はまだ正常に戻っておらず、ローマに届いたのは5月の中ごろであった。その一冊は Francesco Barberini 枢機卿に届いた。この人物は、教皇の甥であり右腕であり、以前博士号をとるためにガリレオの助けを受けた人で、ガリレオは彼をその叔父の教皇と同じく、偉大な友人と考えていた。

1632年、教皇の最大の心配は、太陽と地球の動きではなかった。当時は30年戦争(1618~1648)の真っ最中であり、複雑きわまる問題があった。つまり、カトリックのフランスがスウェーデンとドイツのプロテスタント側に立ち、カトリックのスペインとオーストリア帝国と戦っていたのである。ウルバノ8世は、以前パリ駐在の教皇大使をしていたこともあり、フランスに好意を抱き、その上スペイン勢力の過度の伸張を恐れたのでフランスを失うまいと努力した。それは難しい綱渡りであった。問題は深刻だった。1632年3月8日、教皇と枢機卿の会議の中で、スペインの庇護者であり大使であったボルジア枢機卿は、教皇がカトリック側についていないと公然と非難した。これによって一触即発の緊張が生まれた。このような状況の中で、ウルバノ8世はカトリック信仰を十分に守っていないと解釈されるようなことは、断じて避ける必要を強く感じていたのである。

まさにこのようなときに、5月の中旬、ローマに『対話』の初版本が届き始めたのである。最初は何も起らなかった。しかし、2ヵ月後、教皇がこの書物にひとかたならぬ不満を抱いており、その普及を止めようとしていること、この問題を検討し何らかの措置をとるための委員会を設置しようとしていることが分かった。

現存する史料からは、なぜ教皇がそれほど怒り、上記のような決定に至ったのかは分からない。ガリレオは終始、彼の敵たち(数も多く、影響力をもっていた)が教皇に偏見に満ちた情報を与えたからだと考えていた。例えば、その著作が1616年の決定に反してコペルニクス説を支持すると訴えただけでなく、対話に参加する三人の一人でいつも議論に負けるシンプリシオは、神の全能と人間の説明の限界についての教皇が好んで示す理論を語っているが、これはよくよく考えられた嘲笑である、と告げたようである。実際、教皇はどのように解釈した。何年も後のこと、ガリレオはまだアレチェトリの別荘から教皇に手紙を書き、そのような侮辱は考えたこともないと弁明している。そのうえ、すでに見たように、あの当時のウルバノ8世はきわめて困難な状況の真っ只中におり、1616年に図書検閲聖省が誤りであり聖書に反すると断じた理論を弁護する書物が、ローマとフィレンツェの教会の許可を得て出版されることを許すことはできなかった。

教皇はガリレオへの訴えを検討する委員会を設置し、この問題を検邪聖省(ローマの異端審問法廷)に任せた。聖省はフィレンツェにいたガリレオに、1632年の10月中に裁判所に出頭するように命じた。数ヶ月に及んだ時間稼ぎの末、教皇と聖省はガリレオに、もしローマに出頭しないならば人を送って彼の健康を診断させ、健康の問題がないと判断されれば、鎖をつけてでもローマに連行する覚悟であることを知らせた。教皇はまたトスカナ大公にもこの事件は重大であるから、これ以上干渉しないように厳しく勧告した。ここに至ってトスカナの権力者たちは、ガリレオにローマ行きを勧めた。教皇をよく知っていたローマ駐在のトスカナ大使ニコリーニは、教皇と議論し反対することはガリレオの破滅になると注意した。彼は実際教皇とこの問題について話したとき、しばしば激昂する教皇を見たのである。そこで誰もがガリレオに、ローマに出頭し言われることにすべて従う用意があることを示すように勧めた。

ガリレオは、フィレンツェでまだ絶えていなかったペストのために数日待たされた後、大公が用意した馬車で1633年2月13日(日)にローマに到着。ニコリーニ大使は、ガリレオに至れり尽せりの待遇をし、大公の指示に従ってローマの権威者たちを前に彼の弁護に努めることに余念がなかった。法に従えばガリレオが牢獄で寝起きすることになっていたが、それを免除させることに成功した。ローマに到着してから4月12日までの二ヶ月間、彼はフィレンツェ宮殿(トスカナ大使館と大使の邸宅があった)に住むことができた。当局はガリレオに人と会うことを避けるように忠告したので、彼は家を出ることがなかったが、そこで大使夫妻の懇切丁寧な待遇を受けた。ニコリーニは教皇に裁判をできる限り早く終わらせるように頼んだが、異端審問法廷が審議の仕方をまだ十分に考えていなかったため、裁判は長引くことになる。検邪聖省の文書館で1616年の文書(ガリレオにコペルニクス説について触れないように命じたもの)が見つかったため、審議の中心は1616年の命令への不従順という告発をめぐるものとなった。

ガリレオは1633年4月12日検邪聖省に召喚される。奇妙なことに、彼は弁論において、『対話』の中でコペルニクス説を擁護したということを否定した。彼は、検邪聖省がすでに3人の神学者にこの点について意見を諮問し、4月17日にはガリレオがその著書の中でコペルニクス説を支持していることには疑いの余地がない(これは真実であった)という答申を得ていたことを知らなかった。このことは審議を複雑にした。というのは、被告が証明済みの誤りを否定した場合、彼は裁判官によってきわめて厳しく扱われることになっていたからである。他方、ガリレオはベラルミーノ枢機卿の証明書を示して自己弁護を試みた。その証明書は、枢機卿が1616年の事件直後にガリレオに渡したもので、彼を中傷する者たちに対して自己弁護できるように書いたものであった。そこで、枢機卿は、ガリレオが何ごとについても公に撤回するべきことはなく、ただ彼には図書検閲聖省の禁止命令が知らされたと確認していた。しかし、この文言は、もしガリレオの著作が1616年に断罪された教えを支持している(実際そのとおりであったが)と示されれば、彼に不利に解釈される可能性がある。法廷は1616年にガリレオになされた禁止命令のニュアンスの意味合いについて審議することとなった。ガリレオは枢機卿の証明書を保存していたが、そこにはニュアンスは記されてなかったため、彼はそれについての記憶がないと主張した。不幸なことに、ベラルミーノは既に他界し(1621年)、真実を明らかにできる証人はいなかったためである。

このころ、ガリレオは検邪聖省に寝起きして、監獄にいたわけではなかった。トスカナ大公と大使の度重なる要求のおかげで、ガリレオは聖省の検察官の部屋に住み、大使館から食事が運ばれ、散歩することもできた。そこにいたのは4月12日から4月30日までの19日間であった。

状況を打開するために、異端審問委員の司祭は聖省の枢機卿に前代未聞の提案をした。つまり、ガリレ



オをその部屋に訪ね、彼に自己の誤りを認めるよう説得することである。この案は実行に移され、長い話し合いの末4月27日ガリレオは説得に応じた。翌日、その異端審問委員は誰にもその経緯を話さずに、当時カステルガンドロフォに教皇とともにいたバルベリーニ枢機卿にこの次第を手紙で報告した。その手紙を読むと、この企てを教皇が是認していたことが分かる。こうして法廷はガリレオを断罪することで面目を保ち、かつバルベリーニ枢機卿の提案どおり、ガリレオを自宅軟禁するという寛大な処置をとることもできるようになったのである。

実際4月30日、ガリレオは法廷の前で、すでにずっと昔に書き終えた自分の書物を再読するに、そこに悪意からではなく、自分を一般の人間より賢く見せたいという虚栄心のために、彼自身も信じていない確信をもってコペルニクス説を支持する議論を展開したと認めた。そのとき以降、事態は委員会が予測したとおりに進んだ。その同じ日にガリレオはフィレンツェ宮殿、大使の邸宅に戻ることができた。5月10日、彼は検邪聖省に抗弁のために召喚され、ベラルミーノ枢機卿の証明書の原物を見せ、正しい意向で振舞ったと繰り返した。彼はフィレンツェ宮殿に住みつづけていた。大使はガリレオがヴィッラ・メディチとさらにカステルガンドロフォにも散歩できる許可を取った。なぜなら彼にとって体を動かさないことが健康に悪い影響を与えていたからである。その間にもフィレンツェではペストが猛威を振るい続け、故郷からのある手紙はガリレオがフィレンツェにいないことは運がよいと告げている。

6月16日、検邪聖省は教皇との毎週の例会をもった。クイリナル宮殿で開かれたこの会合には、聖省の枢機卿10人のうち6人が、異端審問委員と顧問官とともに出席していた(今まで言及した全ての審問には、枢機卿たちは出席しなかった。出席していたのは聖省の事務官たちで、かれらが記録を枢機卿たちに送り、教皇とともに枢機卿たちが裁決を下していた)。その日、教皇は拷問の脅しをもってガリレオにその意向の正しさについての審問が行われるように決定した(この拷問の脅しは形式的なものであった。なぜなら拷問は最初から行われなことが分かっていたから)。その後の手順として、ガリレオが聖省の総会の前で異端の疑いのある説を撤回し、聖省の決定によって禁固刑が言い渡され、以後地動説を取り上げないことを命令、『対話』は禁書となり、判決文は各国の教皇大使たち(特にフィレンツェの)と異端審問官たちに送られ、数学と哲学の教授たちの集会で公に読まれることが決定された。教皇は6月19日にこの決定をニコリーニに伝えた。大使は減刑を求め、教皇はすでに前もって決めてある決定の一部を伝え、判決の後でガリレオが禁固刑にならない策をめぐって話し合うことを約束した。教皇と合意の下で、ニコリーニはガリレオに裁判がすぐに終了すること、著作は禁じられることだけを伝え、彼に関する判決は彼の苦しみを考慮して何も言わなかった。

6月21日から24日までガリレオは再び聖省に戻った。22日(水)ガリレオはミネルバの聖マリア修道院に連れて行かれ、そこで判決を言い渡され(聖省の10人のうち7人の枢機卿の署名あり)、聖省の官吏らの前で地動説に関する彼の意見を撤回した。これは彼の人物に直接関わるもので、屈辱的な仕方で公に行われたので、ガリレオにとって裁判の中でもっとも不快なときであった。23日、教皇はクイリナルに集まった聖省の枢機卿たちとともに、ガリレオの禁固刑を減刑しヴィッラ・メディチでの軟禁を言い渡し、24日には彼はそこに移った。30日、ガリレオはローマを去ってシエナ(トスカナ領)の大司教館に移り住むことを許された。ガリレオは7月6日にローマを立ち、9日にシエナに着いた。こうしてローマの悪夢は終わったのである。

異端審問法廷の判決文は当局の10人の枢機卿の名前で始まり、そのうちの7人の署名で終わる(青木、190 - 197頁)。教皇は聖省とともに、ガリレオの有罪を認めその説の撤回を命令することを決定したが、判決文には一度も登場しない。それゆえ、この文書は教皇の教導職の文書ではなく、ましてや決定的で不可謬の性格を備えた教導職の行為ではない。撤回の文書には、「上記の誤謬と異端を呪い嫌悪する」とあるが、教

会の教導職によって異端と決定された教えではない。というのは、その文書ではこの説は聖書に反すると宣言されたが、上述のようにこの宣言は図書検閲聖省の命令を通じて行われたもので、不可謬で最終的な教導職の行為ではないからである。

シエナの司教、Ascanio Piccolomini はガリレオの古い弟子、崇敬者、よき友であった。自宅がフィレンツェに比較的近くまたフィレンツェでのペストの蔓延を考えて、その前から何度も自宅を提供しようと申し出ていた。シエナにおいてガリレオは歓待を受け、ここ数ヶ月の精神的緊張を解きほぐすことができた。トスカナ大公の願いで、教皇は聖省とともに、1633年12月1日ガリレオに、外出と社交をしないことを条件に、フィレンツェ郊外の自宅に戻りそこで軟禁生活を送ることを許した。12月17日には彼は自宅にいたことが確認できる。そして1642年の死のときまでそこに留まった。

アルチェトリでもガリレオは仕事を続けた。そこで『二つの学問についての論考と証明』を完成した。1638年オランダで出版されたこの書物は彼の最も重要な著作で、力学という新しい学問の基礎を紹介している。この力学はその世紀にさらに発展し、50年後に出版されるニュートンの『プリンキピア』に結晶する。これをもって近代の実験科学が生まれたとされる著作である。

### 3、疑問と解釈

ここまで私はガリレオ裁判の基本的データを紹介してきた。ここから先は、これらのデータの評価に移りたい。本稿の問題提起に従って、特に重要と思われる若干の面に簡単に触れてみたい。

最初に、ガリレオ裁判についての我々の知見は十分と言えるのだろうか。また、未知の重要な史料が存在する可能性はあるのだろうか。答えは、現在知られている史料は、裁判のあらゆる面を再構築するのに十分であると言える。ガリレオになされた尋問と彼の答弁、また教皇と検邪聖省の決定は、その全体像を知ることができる。この点について、今から既存の知識をひっくり返すような新しい史料が出る可能性はないと思われる。確かに空白はある。大切なものとしては、1632年の夏、つまり『対話』がローマに届いてから、教皇がこの問題の検討委員会を設置したときまでの間、何が起きたかについて。誰がどのように教皇に知らせたのか。ガリレオは常に、この裁判は彼の敵たちが教皇に悪意に満ちた報告をした結果と考えていた。このことを明らかにする史料が見つかる可能性はあり、それによってなぜことがあのように進展したかがよりよく理解されるかもしれない。ひょっとして、事件がどこまで別の仕方で行進する可能性があったかをも知ることができるかもしれない。いずれにしても、それによって我々がすでに知っている事実が変わるわけではない。すなわち、ガリレオが外見はそれを放棄していたふりをよそおいながら、数年にわたってコペルニクス説の流布に努めていたこと、教皇が、称賛して止まなかった友人が実は彼の考えとは異なる策謀を画策していたことを知り深く傷ついたこと、である。

このことはガリレオが故意に嘘をついていたことを意味するのではない。彼がコペルニクス説を正しい理論であると考えていた(裁判の後も)ことは疑いない。クリスティーナへの書簡の中で、地動説と聖書の見かけの矛盾はどのように解決できるかを説明している。彼の説明は正しく、自分でもそれを自覚していた。そのため、1616年と1633年の断罪の後でも、自説が正しいことを信じて良心の落ち着きを失うことはなかった。彼の友人たちや、十分な情報を得ていた人々にも同じことが言える。それならば、なぜ教会当局は、確かに当時完全には証明できていなかったにしても、証明の可能性があり、実際後年新しい証拠が見つかった理論を断罪したのだろうか。

この疑問に答えるため、今日我々が知る近代の実験科学はガリレオの時代にはまだ萌芽の段階にあったということをわきまえる必要がある。まさにガリレオはその創始者の一人であった。そのために、教会当局者がもっていたガリレオ観は、ほとんど4世紀にわたる物理学の発展を知っている我々の持つガリレオ観とはかなり異なるものであった。ガリレオは天文学における若干の重要な発見をなしとげ、それによって彼はそれなりの高い評価を受けていた。しかし、だからといって地動説を科学的に証明することはできなかった。近代の自然科学はまだ現実には存在していなかったのである。この科学の誕生に関するガリレオの最も重要な貢献は、裁判の後に出版された『新科学対話』においてなされたのである。教会当局者たち(ベラルミーノ、ウルバノ8世、と他の多くの人々)は当時の大多数の大学教授たちと同じく、地球が回るという説は日常の確実な経験に反する不条理な理論と考えていた。コペルニクス説をまじめに考慮するのは容易なことではなかった。1616年に太陽が不動で地球が動くという説を検討した神学者たちは、第一にこの説が哲学的に不条理であると判断し、その上聖書に反すると主張した。ベラルミーノも、他の教会人とともに、もし地球の動きが証明されたなら、聖書の一連の箇所を文字通りではない仕方解釈せねばならなくなると忠告した。彼らはその解釈が可能であると知っていたが、地球が動くということは不条理であり決して証明できないだろうと考えていた。このようなことはガリレオ裁判を正当化しないが、それがなぜ起きたかを当時の歴史的状況の中で評価し理解することを可能にする。

ガリレオ裁判を科学と宗教の対立と理解すべきではない。ガリレオはいつも自分をカトリック信者であると考えていたし、地動説がカトリックの教えと矛盾しないことを示そうと試みた。他方、教会側も科学の進歩に反対したわけでもない。1611年ガリレオがローマに赴いたときに、イエズス会のローマ学院で開かれた行事で彼の天文学の発見を祝して公の祝賀会が催された。問題は、彼らは地動説が科学の真理であるとは考えず、そのうちのある人々(その中にウルバノ8世がいた)は決して証明できないと信じていたことにある。

ガリレオの敵たちは裁判を起すにあたり重要な役割を果たしたようである。ガリレオ自身の論争好きの性格も1610年の著作(訳者注、『星界の報告』)が惹き起こした論争に火をつけるのに一役買った。しかも、彼自身が不必要にこの敵意を煽ったので、1632年に『対話』が出版されると彼の敵たちは、困難な状況に陥っていた教皇がこの書物に不快を感じ、実力行使に訴えてでも問題に介入しなければならないと判断させるように、この真相をガリレオの不利になるように伝えたことは想像に難くない。ウルバノ8世の性格も問題を大きくした。彼も激しやすい性格で、ガリレオが彼の誠実な友情を裏切ったと考えたのである。何度となくトスカナ大使のニコリーニに、ガリレオに馬鹿にされたことと怒りを露わにしたことが分かっている。ガリレオは教皇を笑いものにする意図はなかったことは疑いないが、彼の敵たちが1632年の夏、教皇にそのような讒言をしたようで、これがこの成り行きを決定したと言える。

しかし、ガリレオの敵だけに問題の責任があるのではない。地動説はキリスト教にとって厄介な問題になるように見えた。もし地球がただの一つの星にすぎないのなら、もし肉眼で見えるよりずっとたくさんの星が存在するのなら、地球のような生物が住む星がたくさんあると言ったジョルダノ・ブルノーと同じ解釈ができるのではないか。その場合、神の子の託身と贖いはどういう意味を持つのか。宇宙の他の場所に住む知性ある生物の救いはどうなるのか。これらは現在、当時よりももっと現実味をもって話されるテーマである。(中略)。コペルニクス説をブルノー説に結びつけられるのは、ガリレオには不利であった。1616年にコペルニクス説を断罪したのは教皇パウロ5世とベラルミーノ枢機卿であったが、この二人とも1600年にブルノーの裁判が終了したとき宗教裁判所の枢機卿であった。それゆえに、かれらがコペルニクス説を吟味したとき、ブルノーの神学上の誤謬と関連付けたことは十分にありえることである。

地動説は他の視点からもキリスト教の脅威となるように思われた。ガリレオの『対話』にはアリストテレス哲学への強烈な批判があったが、この哲学は13世紀から神学の補助学として使われてきたものであった。この哲学では、この世に目的というものが存在すること、感覚で感じる性質は客観的実在で人の認識の基礎をなすことなどが認められていた。これらのテーゼが、ガリレオの機械論的数学的哲学によって破壊されるように思われたのである。新しい自然科学は古い自然哲学との論争の中で産声をあげていたが、後者が残した空白を埋めることはできないように見えた。ガリレオの批判はアリストテレス哲学の物理学の面のみに向けられており、確かに古い物理学は放棄されるべきものであったが、新しい学問は物理学だけにとどまらずそれを支える哲学体系も破壊しようとしているように思われたのである。実は、この問題は現在も続いている。それどころか、最近の科学の発達、この問題をますます先鋭にしたと言えるであろう。形而上学的次元と人間生命の倫理の次元を含めたより広いビジョンの中に、自然科学の発展を組み入れる努力を要求する声は非常に高い。この意味において、あの当時新しい科学の中に困難の芽生えを見た人たちは的を得ていたところもあったのである。もちろん、問題は科学自体のものではない。その正当性を疑うことは馬鹿げている。科学の発展は両義的で、科学を悪用することができるという事実は、科学を非難する理由とはなりえない。ただ繰り返したいのは、ガリレオ裁判の根底には、現実の問題、今なお未解決の問題があったということである。科学的知識の範囲を問うことが、その問題の一つなのである。

1623年に発表されたガリレオの著作『黄金計量者』に垣間見られる原子論的哲学のために、彼を教皇庁に訴えるという動きがあった。この著作でガリレオは可感的質(色、匂い、味)の客観性を否定したが、これは全実体変化の後にも聖体にはそれを支える実体なしに秘跡の外観(パンの偶性、たとえば、その可感的質)が残るという聖体についてのトレント公会議の教えに矛盾した。学者の中には、1632年にガリレオになされた告訴の最も深い理由はこれであって、教皇が裁判がこの線で進めば結果はより悪いものになることを危惧し、訴因を地動説に変えることに成功したという者さえ出た。この種の訴えは確かになされたが、それが裁判の中心であったというのはいささか誇張である。しかし、この事実は新しい科学が機械論的哲学を内包しており、それが当時一般に認められていた哲学や神学と対立したということを示してくれよう。そして、この問題は現在も依然として続いているのである。

ガリレオ裁判は、自然科学の進歩に深刻な妨げとはならなかった。ガリレオが蒔いた種はイタリアでもすぐに芽を出した(注4)。数十年後ニュートンが近代物理学を正式に誕生させる。ガリレオの業績はしっかりと基礎付けられた。

最後に、ガリレオ裁判に匹敵する裁判も他に例を見ないことを示しておきたい。この裁判は、他にもたくさんあった裁判の一つではなかった。類似のケースは進化論の場合であるが、進化論は科学の分野においては、教会によって断罪されたことは一度もない。墮胎や安楽死や生命倫理に関する教会の干渉をガリレオ問題と並べるならば、これらの問題が確かに科学と関連した要素を持つが、それらは本質的に科学の問題ではなく、せいぜい科学的知識の応用の問題であることを指摘せねばならない。(略)。

注1、検邪聖省の神学顧問官会議の教令(1616年3月5日)。

「地球が動き太陽が静止しているという、聖書に真っ向から反する、例のピタゴラスがかつて教え、ニコラス・コペルニクスが『天体の回転について』で教え、またディエゴ・スニガがその『ヨブ記』の注釈で教えた説が広がっており、多くの人々に受け入れられていることが検邪聖省の知るところとなった。これらのことはまた、カルメル会司祭パオロ・アントニオ・フォスカリーニが上記の地

動説が真実であり聖書に反しないことを証明するために1615年に書いた手紙（訳者注、その題名が書かれているが省く）でも分かる。そこで、以下の決定がなされた。つまり、この説が今後広がりカトリック信仰の害にならないように、上述のコペルニクス『天体の回転について』とスニガのヨブの注釈を、修正を終えるまでの間発刊禁止とし、またフォスカリーニ神父の本を断罪し完全に禁止すること。またこの教令が禁じ断罪し中止する説を教える書物はすべて禁止されること。」

注2、図書検閲聖省は、1572年に作られ1917年に廃止された。その役目は信仰に害を及ぼす書物を指摘するという司牧的なものであった。確かに、この作業は教理と関係があるが、この聖省は教会が不可謬で決定的な教義を提示する手段ではなかったし、誰もそのように考えなかった。・・・またもし教皇が不可謬の教義を提示する意志があるならば、その意志が分かるようにはっきりした形で文書に表す。たとえば、1854年教皇ピオ9世が聖母の無原罪の受胎という教義を定めたときは次のように言う。「・・・私は我々の主イエズス・キリスト、使徒聖ペトロと聖パウロおよび私自身の権威をもって次の教義を宣言し、公表し、定義する。・・・」(デンジンガー、『カトリック教会文書資料集』、2803)。あるいは、1950年教皇ピオ12世が、聖母の被昇天の教義を宣言したときの文言は、「・・・我々の主イエズス・キリストの権威と、使徒聖ペトロと聖パウロの権威、および私の権威により、無原罪の神の母、終生処女であるマリアがその地上の生活を終わった後、肉身と靈魂とともに天の栄光に上げられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する」と言う。(『前掲書』、3903)。

注3、ガリレオは地球が動いている証拠として潮の干満を持ち出した。・・「地球の半面は太陽に面しているとき、公転速度から自転速度を差し引いた速さでゆっくり進み、太陽に背を向けた半面は公転速度に自転速度を子輪得た速さで進み特に速くなる」、「そこで太陽の周囲を回っている地球の動きに変化があるので、海の水が置き残されたり、進みすぎたりして水平運動を起こし、これが潮の干満となる」と考えた。・・・ある人がガリレオに「あなたの説のように、満潮と干潮とが自転と公転によるのであれば、潮汐は毎日1回しか起らないはずだが、実際には毎日2回起るではないか」と問うた。これに対しガリレオの返事は、「それは狭い地中海における偶然の観測に基づくもので、大洋における一般の周期とは異なる。その説をなすものは、海潮の真の原因を知らないからである。才知あるケプラーが潮の干満は月の引力によるという子供じみたことを信じているのは奇妙である」と答えた。

なお、潮の干満の他に、1616年後惑星の視運動（惑星の恒星に対しての位置の変動）と太陽の黒点の移動とを間接の証拠としてあげているが、惑星の視運動はデンマークの天文学者ティコ・ブラーエが天動説によって同じ明瞭さと確実さを出しているので地動説の証明としては弱い。黒点の動きは太陽の自転の証明となり、また太陽の自転軸が常に同方向を保っている証拠となる。しかし、これだけでは地球が太陽の周囲を回転しているというはっきりした結論は出ない。無理にそこからその結論を引き出そうとしてガリレオは回転軸の方向の一定性まで否定している。

（茨木晃、『ガリレオ・ガリレイの研究』、手稿、4 - 5頁、一部変えています）

注4、ガリレオ裁判がイタリアの科学の発展に悪影響を与えなかったという評価は、留保を要する。『キリスト教史6』、平凡社には、「イタリア各地のアカデミーはガリレイ事件の衝撃を受けて解散した。代わりにロンドンやパリに自然科学方面の新しい学会が誕生したが、このことは自然科学の中心が単に空間的にローマから遠くはなれたということにとどまるものではなかった」とある。(187頁)。